

## 観客民主主義の転換 — 政治参加の人間像を考える —

社会福祉学科 福祉政策系 佐藤彩乃

民主主義を象徴する選挙制によって、本当に国民の声は届けることができるのだろうか。現在「民主主義国」の大半で、自身の立場や利益を重視したエリート集団と政治に関心のない国民による政治の実態、人民が統治する民主主義本来の姿との乖離が問題視されている。

まず選挙制中心主義に疑問を呈し、「話し合う」ことを重視した熟議民主主義を検討した。しかし、日本においては「話し合い」の場を設けるだけでは不十分であると考え、新たな政治参加像として肩書や属性を重視しない「人間としてのコミュニケーション」像を提案し、政治参加しやすい空間を追求した。

結果的に、これらの政治参加像の模索は、従来の悲観的な観客民主主義を転換した「ポジティブな観客民主主義」へと到達する。現在の日本のように、政治に距離のある状態をあえて肯定し、政治に嫌悪感を抱かない距離を保ちながら参加していくのである。

政治参加により集結した国民の意見には、社会の物事を動かす「力」があると考えている。国民の「力」が社会を変え、人々の幸福が守られた未来を導くものになることを願う。